

日本の文学

佐藤春夫



A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE



日本の文学

31

佐藤春夫

中央公論社

日本の文字 31

©1966

佐藤春夫

昭和41年7月25日初版印刷
昭和41年8月5日初版発行

価 390 円

発行者 宮本信太郎

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 本州製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ゴール 佐賀板紙株式会社
製本 中央精版印刷株式会社製本部

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

春夫詩抄

初期詩篇より

殉情詩集

我が一九二二年より

佐藤春夫詩集より

車塵集より

魔 女より

閑談半日より

佐久の草笛より

玉笛譜より

抒情新集より

未刊行詩篇より

44 42 40 38 36 32 28 24 21 10 7 7

西班牙犬の家

田園の憂鬱

お絹とその兄弟

美しい町

佗しすぎる

女誠扇綺譚

F・O・U

のん・しゃらん記録

女人焚死

晶子曼陀羅

344 313 289 261 227 192 157 133 54 46

注 解
説 解
年 譜

口 絵
挿 画

伊 藤 整

〔自画像〕

佐藤春夫

〔春夫詩抄〕

岸田劉生

川上澄生

〔西班牙犬の家〕「お綱とその兄弟」
「美しい町」
「忙しすぎる」

〔女誠屬稿譯〕「のん・しゃらん
記録」
「女人焚死」

芹沢銈介

〔田園の憂鬱〕

島田訥郎

〔F・O・U〕

谷中安規

〔晶子曼陀羅〕

石井柏亭

佐藤春夫

春夫詩抄

全詩集のはじめに自叙

聞説きくたらく 古人は一吟に雙淚さうるるを流し
また斗酒食うべて名吟多なまなりきと
知らずや真珠は貝の疾にして
詩はわが不眠症の賜物のみ
小夜こよふけわたりてわれひとり
わが命を削りつつそぞろに詩に遊び
ものに飢ゑわが神經を食みつつ
世に用なき拙き歌書きつづけたり
そはわが生活の必要なれば
紅顔より白髪に及ぶ
かかる生涯既に五十年に近し
我はわが歌の色沢いろつや乏しきを知り
わが無才むざいを恥づれども

私ひそかに誇る君見よや

詩神の寵の我に篤あつきを

わが歌はなどか判者はんざに問はん

よし、わが白珠しらたまの歌 我し知れば。

昭和壬辰春日

佐藤春夫

初期詩篇より

愚者の死

千九百十一年一月二十三日

*大石誠之助は殺されたり。

げに嚴肅なる多数者の規約を
裏切る者は殺さるべきかな。

死を賭して遊戯を思ひ、

民俗の歴史を知らず、

日本人ならざる者

愚なる者は殺されたり。

「偽より出でし真実なり」と

絞首台上の一語その愚を極む。

われの郷里は紀州新宮。

渠の郷里もわれの町。

聞く、渠が郷里にして、わが郷里なる

紀州新宮の町は恐懼せりと。

うべさかしかる商人の町は歎かん、

——町民は憤めよ。

教師らは国の歴史を更にまた説けよ。

病

うまれし国を取づること。

古びし恋をなげくこと。

否定をいたくこのむこと。

あまりにわれを知れること。

盃とれば酔ざめの

悲しさをまづ思ふこと。

乃木大将の死に就いて世の新聞

記者に言ふ

* トルストイに關しニイチエに關して

卿等かつて危険思想家なる語を生みき

いま何が故に乃木大将をたたふるや

乃木大将の死は国民性の発露にあらず

ただ理想家の共通的人格のみ

(行為は思想の輪廓にすぎず)

思想は人格の輪廓にすぎず)

断じて卿等の口挟むをゆるさず

乃木大将の死に於て国民性を見ず

われ卿等の口に於てこれを見たり

後朝問答

戸によりて筑紫女の言ひけるは

東男あづまをとこのうすなさけかな

見みかへりて東男あづまをとこの言ことひけるは
筑紫つくし女のうすなさけかな

わがはたち

まなびやのふみうりはらひ
国禁こくきんのふみよみふけり
さけたうべうたあげつらひ
なみだするはひとのしらぬま

さくら

*Edward Thomas

さくら木きは覆おほひかぶさりて花はなちりそそげり。
通とほひにし人ひとみなはずでに失こせにし古徑こけいのあたり、
撒まかれて草くさに降くだる様さまは婚ま礼れいの場ばの散さん華けなり、
早はやき五月ごごの今朝けさ、誰たれ嫁よめぐとしもなきものを。

*キイツの艶書えんしよの競売けいばいに附つせらるるとき

(オスカア・ワイルド)

これはこれことごと悉ことごとくエンデイミオンが
別わかれ居ゐて心こゝろひそかに愛あいしたるものにかきし文。
いま耀きら市の喧騒けんそうは

あさましく垢あせづきし各々の紙幣しへいをもてとりひきす。
げにや詩人しじんが熱情ねつじやうの一つ一つの脈動みやくどうに
あきうどの評価ひやうかを呼よばふ。かの輩たぐひは芸術げいじゆつを愛あいせず
かの輩たぐひは詩人しじんの心の宝たから玉たまを打碎うちくだき

これによりて小さく且つ病やまめる眼まなこを得意えいげにかがやか
すなり。

*聞きかずや、そのむかし

遠とほき東方とうほうのとある町まちに、兵士へいし等らありて
炬火たきを醫かして真夜中まよなを走はせ

哀あはれなる人の衣ころもを得とんとして罵ののりさわぎ

さてはその衣ころもを賭物たものとして鬮くじをひき

神かみが驚おどきをもはたそが歎なげきをも思おもはざりし事を。

殉情詩集

殉情詩集自序

われ幼少より詩歌を愛誦し、自ら始めてこれが作を試みしは十六歳の時なりしと覚ゆ。いま早くも十五年の昔とはなりぬ。爾來、公にするを得たるわが試作おほよそ百章はありぬべし。その一半は抒情詩にして、一半は當時のわが一面を表はして社会問題に対する傾向詩なりき。今ことごとく散佚す。自らの記憶にあるものすら数へて僅に十指に足らず。然も、些の憾なし。寧ろこれを喜ぶ。後、志を詩歌に断てりとは非ざりしも、われは無才にして且つは精進の念にさへ乏しく、自ら省みて深くこれを愧づるのあまり遂には人に示さずなりぬ。但、殉情の人は歌ふことにこそ纔に慰めはあれ、譬へば、かの病劇しき者の呻くことによりて僅にその病苦を洩すが如し。されば哀傷の到るものある毎にわれは恒に私に歌うて身をなぐさめぬ。又譬へば獬矢を負へる獣の森深く逃れ来りて、世を悪み人を厭ひて然も己が命を受するの念はいや募り、己が口もて己が創痍を舐め癒さんと努むるが如し。

世には強記にして好事の士もあるものなり。面榮ゆくもわ

がかの試作を今更に語り出でて、時にはこれを編みて冊子とせよなど勸むる友さへあり。されど誰かは、未熟にして早く地に墜ちたる果実を拾ひて客の爲めに饗宴の卓上に盛りんや、乃ち篤くこれを謝するのみなりき。この機にのぞみてわれは改めてかかる人人に乞はん。わが旧き詩歌は悉くこれを忘れたまへ。少しく言葉を弄ばんか。今日のものとて同じく然したまへ。然らば今この集を敢て世に問ふの故は如何。曰く米塩に代へんとす。曰く春服を求めんとす。否、われは口籠ることなくして言ふべし。聴き給へ、われ今日人生の途なかばにして愛恋の小暗き森かげに到り、わが思ひは転た落莫たり。わが胸は輦の下に碎かれたる薔薇の如く呻く。心中の事、眼中の涙、意中の人。児女的情われに極まりては偶成の詩歌乃ちまた多少あり。げに事に依りてわが身には切なくもあるかな、わがこの歌。然れども既に世に問はん心なければ、わが息吹なるわが調べはいつしかに世の好尚と相去れるをいかにせん。われは古風なる笛をとり出でていま路のべに來り哀歌す。節古びて心をさなくただに笑止なるわが笛の音に、慌しき行路のいかに泣くべしやは。たとひわが目には水流るるとも、知らず、幾人かありて之に耳を俯し、しばしそが歩みを停むるやいかに。

嗟吁、わが嗚咽は洩れて人の爲に聞かれぬ。われは情癡の徒と呼ぶるとも今はた是非なし。

大正十年四月十三日

佐藤春夫

同心草

不結同心人
空結同心草

薛濤

水辺月夜の歌

せつなき恋をするゆゑに
月かげさむく身にぞ沁む。
もののあはれを知るゆゑに
水のひかりぞなげかるる。
身をうたかたとおもふとも
うたかたならじわが思ひ。
げにいやすかるわれながら
うれひは清し、君ゆゑに。

或るとき人に与へて

片こひの身にしあらねど
わが得しはただこころ妻

こころ妻こころにいだき
いねがてのわが冬の夜ぞ。
うつつよりはかなしうつつ
ゆめよりもおそろしき夢。
こころ妻ひとにだかせて
身も霊たまもをのきふるひ
冬の夜のわがひとり寝ぞ。

また或るとき人に与へて

しんじつふかき恋あらば
わかれのこころな忘れそ、
おつるなみだはただ秘めよ、
ほのかなるこそ吐息なれ、
数ならぬ身といふなかれ、
ひるはひるゆゑわするとも
ねざめの夜半よなにおもへかし。

海辺の恋

こぼれ松葉をかきあつめ

をとめのごとき君なりき、
こぼれ松葉に火をはなち
わらべのごときわれなりき。

わらべをとめよりそひぬ
ただたまゆらの火をかこみ、
うれしくふたり手を取りぬ
かひなきことをただ夢み、

入り日のなかに立つけぶり
ありやなしやとただほのか、
海べのこひのはかなきは
こぼれ松葉の火なりけむ。

断*

さまよひくれば秋ぐさの
一つのこりて咲きにけり、
おもかげ見えてなつかしく
手折たればくるし、花ちりぬ。

琴うた

吹く風に消息をだにつけばやと思へどもよし
なき野べに落ちもこそすれ
梁塵*秘抄

かくまでふかき恋慕れんぼとは
わが身ながらに知らざりき、
日をふるままにいやまさる
みれんを何にかよはせむ。

空ふくかぜにつけばやと
ふみ書きみれどかひなしや、
むかしのうたをさながらに
よしなき野べにおつるとぞ。

後の日に

つれなかりせばなか／＼に
そらにわすれて過ぎなまし、
そもいくそたびしほりけむ
たもとせつなしかのたもと。

せつなさわれにつもるとも

沾^つちてはかわくものなれば
昨日^{きのう}のたもとにこと問はむ
ぬるるやいかなほけふも。

よきひとよ

よきひとよ、はかなからずや
うつくしきなれが乳^{ちち}ぶさも
いとあまきそのくちびるも
手^てをとりて泣けるちかひも
わがけふのかかるなげきも
うつり香^かの明日^{あす}はきえつ
めぐりあふ後^{のち}さへ知らず
よきひとよ、地上^{ちじやう}のものは
切^きなくもはかなからずや。

こころ通はざる日に

こころを人にさらせども
げにもとなげく人ぞなき、
こころのいたで血^ちを噴^ふけど

あなやと叫ぶ人ぞなき。
すまじきものは恋にして
苦しきものぞこころなる、
こころはいとし、すべもなし、
手にはとられず目には見られず。

なみだ

埋^く火^かもきゆや泪^{なみだ}の煮^にゆる音

芭^か蕉^{きやう}*

あるはのきばゆたつけぶり、
あるは樋^ひをゆくたにのみづ、
あるはわが目にわくなみだ。
これをさだめとさとるゆゑ、
ぜひなきものと知るらめど、
とめてとまらぬものなれば、
せつなやあはれほそほそと、
ひとすぢにこそながるらし。

感傷肖像

摘^つめといふから

はらをつんでわたしたら、
無心でそれをめちやめちやに
もぎくだいてゐる。

それで、おこつたら

おどろいた目を見ひらいて、

そのこなごなの花びらを

そつと私わたしの手にのせた。

その目は涙ぐんで笑ひ

その口は笑つて頬は泣いてゐる。

表情の戸まよひした

このモナリザはまるで小娘だ。

感傷風景

あなたとわたしとは向ひあつて腰をかけ、

あなたはまぶしげに西の方の山をのぞみ、

わたしはうっとり東の方の海をうかがひ、

然しふたりはにこにこして同じ思ひを樂しむ。

とありし日のとある家の明あかるいバルコン。

何も知らない家の主人にはよき風景をほめ、

ふたりはちらちらとお互の目のなかを樂しむ。

恋人の目よそれは何といふ美しい宇宙だらう。

全くあなたのその目ほどの眺ながめも花もどこにあらう

……

お、思ひ出すまい。ふたりは庭のコスモスより弱

く、

幸福は卓上につと消えた鳥かげよりも淡あはく儂はかなく、

歎なげきは永ながく心に建てられた。あの新築の山荘のやうに。

昼の月

旧作のうち記憶に残れるもの三四。

別に「昼の月」及び読み人知らぬ古

曲の一節を拾ひてここに採録す。

旧作は概ね数年前わが二十二三歳ご

ろの作なり。

ためいき

一

紀きの国くにの五月なかばは